

## 子どもの音楽的表現に関する保育者の理念について

佐野美奈<sup>1</sup>

### Kindergarten Teachers' Beliefs Concerning Children's Musical Expression

Mina Sano<sup>1</sup>

The purpose of this study was to examine kindergarten teachers' beliefs concerning children's musical expression. The data obtained from the questionnaire answered by 200 kindergarten teachers residing in geographically dispersed place was processed with statistical technique. Seven elements defined by the author based on Jalongo's research regarding teachers' involvement style were extracted from the aspect of age, teaching career and regions of work place. As a result, it was found that the importance of musical expression on early childhood education was widely accepted among teachers as a consensus. Furthermore, teachers tend to support children's play activities to enhance their expression. At the same time, characteristics were included in elements concerning teachers' involvement such as "word", "participation", "instruction as discipline" and "involvement by piano performance". The obtained findings were consistent with statistically processed result. In some situations teachers' behavior and beliefs did not coincide, though teachers did not aware. Such cases were examined by quantitative analyses such as principle component analysis and cluster analysis.

Key Words : teachers' beliefs, questionnaire, musical expression, teachers' involvement, quantitative analyses

#### はじめに

1990年代以降、表現教育に関する米国の先行研究では、子どもの遊びと表現との関係に着目して、表現教育の方法が少しずつ再考されるようになってきたと言えよう<sup>1)</sup>。それは、ドラマ教育の手法を幼児教育へ導入することであり、芸術教育への導入の手法として子どもの役割演技の発達を再認識することであると考えられる。

しかし、わが国においては特に、幼児教育者が実践場面で試行錯誤しているにもかかわらず、表現教育の手法の中でも教師のかかわり方に関する先行研究はほとんど見られない。

そこでまず、昨年度栃木県S短大近郊(栃木県、福島県、茨城県、埼玉県、群馬県)で行われた幼稚園教育実習の際、採取された子どもの表現に関する

保育行動を、主に教師のかかわりの視点から定量的に分析した<sup>2)</sup>。その結果、教師のかかわり方の保育行動について、①肯定・否定、②言葉・ピアノ、③強制・自発的という成分が抽出された。①の及ぼす影響が最も大きく、受容的なかかわりの中でも、ピアノによるかかわり方は異質であるという傾向が一貫して明らかになった。

その考察結果を踏まえ、本年度は前年度の手法を拡張し、教師が子どもの表現をどう捉え、またそのかかわり方に関してどのような理念を持っているかについて質問紙調査を実施し、定量的分析を行った。

今回は、それらの結果考察によって、子どもの音楽的表現に関する保育者の理念を明らかにしていきたい。そのために、分析から抽出された教師の理念と保育行動との差異についても考える。

#### I. 質問紙調査による教師の「子どもの音楽的表現」についての理念の分析

<sup>1</sup> 佐野短期大学 社会福祉学科

## 1. 調査の目的

教師の子どもの「音楽的表現」へのかかわり方を中心とした意識動向を分析することによって、その理念を明らかにする。そして、前述註2)の平成14年度に分析した保育行動との比較考察を行う。

## 2. 方法

子どもの音楽的表現に関する意識調査(質問紙調査)を行った。調査の対象は、昨年度の観察実習先であり、今年度も実習先となった埼玉、群馬、茨城、福島、栃木の5県の100幼稚園の幼稚園教諭200名である。

質問内容は、保育における音楽的表現の位置や教師の価値観を問う項目15項目、音楽的表現への教師のかかわり方21項目から成る。中でも、教師のかかわり方10項目については、昨年度の観察事例の一部を具体的に問い直す形であり、保育行動、I.(指導) P.(参加) W.(言葉かけ) K.(ピアノによるかかわり) O.(観察) NO.(かかわらない、無関心) N.(拒否的な態度)<sup>3)</sup>を回答項目とした。

これらの結果を、全体と教師の年代別、地域別によって以下のように集計し考察した。

## 3. 結果

今回の集計結果は、全体で60.05%の回収率であり、地域別では、埼玉県50%、群馬県100%、福島県66.67%、茨城県81.25%、栃木県50.72%(県南47.78%、県北56.25%)の回収率であった。

### (1) 保育における「子どもの音楽的表現」の位置

まず、質問項目1(1)～10までの集計結果を考察する。

Q1(1)について、音楽に関する発表会を行っている園は78%(内、年2回以上18%、年1回71.60%)であり、そのことについて非常に重要であると考えている教師は78.66%であった。

また実際の保育場面では、音楽的表現をほとんど重視していないと思われる園はなかったという結果であった。Q2では、各園で音楽的表現が重視されていると思われるかについて、非常に重視19.16%、普通より重視50.41%と考えられていた。Q3(1)ではQ2を教師自身がどう考えているかについて、非常に重視25.20%、普通より重視54.44%と考えられていることがわかった。

さらに、Q3(2)「音楽的表現以外に各園で重視されていること」は、絵画(22.20%)、造形(16.40%)と続き、その他(31.28%)では、遊び、体育、言葉による表現などの回答が多く見られた。ただし、絵画と造形については複数回答が多く、音楽的表現以外と

いうことであっても、Q3(1)(2)で「音楽的表現を普通より重視している」を多く回答される傾向があった。

教師の信条としては、総合的な表現の発達が必要であると考えており、「特にない」と回答した人も、「音楽的表現を普通より重視している」と回答していた。

加えて、Q4に見られる音楽的表現の位置は、行事において占める割合が92%と非常に重要視されていることがわかった。また、Q5から、日常的な子どもの遊びの中でも音楽的表現が重要であると、62%が回答していた。これらのことから、音楽的表現は子どもの発達に密接な関係があると考えられていることがわかる。

一方、日常的な保育の中で、Q6「日常的な園生活における音楽的表現の生起頻度」Q8(1)「音楽的表現の教育的役割」から次のようなことがわかった。それは、子どもの自発的な音楽的表現が多く生じており、各園で音楽的表現を重視しているために、子ども達の自発的な音楽的表現が普通より多く生じていると考えた教師が半数近くいたということである。

そうした音楽的表現の教育的役割は非常に大きく、全体の約6割は音楽的表現が生じるような環境構成の努力を行っていることがわかった。それは、身近に楽器を置いたり、リズム遊び、遊びの中に音楽的表現を取り入れたりすることである。

特に、教師と日常的なかかわりの中で、音楽的表現の教育的役割は生活のリズムとして(34.03%)、園児の集団行動をまとめる(33.77%)、次の行動を促す(20.53%)と考えられている。逆に、遊びと仕事のけじめがつかず、その音楽的表現が一種の合図のように習慣化されており、本来の意味をなさなくなっているといった考えもあった。

けれども、Q9「子どもの自発的な音楽的表現へのかかわりの必要性」について、かかわる必要があると多くの人が考えており、子どもの表現の発達に大きな関心が寄せられ、そのかかわり方に試行錯誤されていることは事実である。そのかかわり方について、Q10の回答では、「子どもの活動に参加する(41%)」が最も多く、続いて「言葉かけをする」「ピアノを弾く」といったものであり、子どもの活動に積極的に介入し援助したいという信条が示されている。

以上のことから、幼稚園教育における「子どもの音楽的表現」は、子どもの発達にとって重要であると考えられ、保育の中で不可欠な要素であると見なされていることがわかる。

### (2) 教師の年代別による考察

次に、教師の年代によって理念にどのような差異が見られるかについて考察した。

まず、Q1(3)の回答数からわかるように、発表会における音楽の必要性を大きく考えており、Q3(1)での音楽的表現の重視については20代前半で特に「普通より重視している」と考えている。Q3(2)教師の音楽的表現以外に重視することは、20代で比較的絵画が多く、30代40代では絵画造形が半々であった。続いてQ4、Q5からもわかるように、年代を問わず音楽的表現を重視し、「子どもの遊びの中にも必要」と大半が回答している。その教育的役割については、Q8(1)で、20代～30代が特に「場合によっては役立つ」、20代後半が多く「非常に役立っている」と答えている。

さらに、子どもの自発的な音楽的表現に、Q9「教師のかかわりが必要であるかどうか」については、特に保育経験の浅い20代前半と50代以上の保育経験の長い年代で同様に重視している。それは、20代前半では、保育士や幼稚園教諭養成校における教育効果の現れであり、50代以上は長い年月に渡る保育経験の積み重ねによる結果得られたものであると言えよう。

Q10。「教師の年代別による子どもの音楽的表現への対応」については、信条としては「子どもの活動に参加する」が最も多く、「言葉かけ」「ピアノによるかかわり」「観察、見守る」が続いている。

## II. 教師のかかわり方の理念についての分析

### 1. 全体考察

ここでは、子どもの年齢の発達に対して教師のかかわり方がどのように変化していくかについて検討した。これらは、質問項目11(1)～(7)、12(1)(2)の部分に相当する。これらに関する回答の集計結果を、前述の教師のかかわり方の諸要素について以下のように考察した。

I：「子どもへの統制的な指導」は、3歳では少なく、4歳、5歳になるにつれて、このかかわり方は次第に増す傾向にあった。

W：「言葉かけ」は5歳児で最も多く、子どもの自発的な活動を促し、その展開を援助したいという考えが表れている。同時に、年長児では子ども達の自発的な音楽的表現への遊びの展開が多く見られるという発達段階であることを実証していると言えよう。

K：「ピアノによるかかわり」は、3歳ではなく4歳5歳になって少しずつ増えており、異年齢集団でも、このかかわりを用いたいと考えられている。

Q10で一般的に「ピアノによるかかわり」をしたいと考えた人が多かったのに対して、具体的な場面になると考え直す傾向にあり、少なくなっていることがわかる。

P：かかわり方においては「参加」が最も多く、3歳～4歳で多く、5歳では非常に少なくなっている。場面にもよるであろうが、理念上は就学前期の子どもにはあまり直接的にかかわらず、子ども達自身による自発的な活動の展開を望んでいると考えられる。

O：5歳児で最も多く、異年齢集団でもまず「観察」してからという考え方が多く見られる。

NO：「そこにいないかかわらない態度」を示すものであり、わずかではあるが4・5歳において見られた。

N：「拒否的な態度」は、5歳においてわずかに見られた。5歳児の表現に音楽的な誤りが見られた場合、その活動をやめさせるという考え方である。ほとんどの人が年齢にかかわらず、子どもの活動に拒否的な態度を望んでいない。一緒に活動する中で、自然に子どもに自らの誤りに気づかせるような考え方がなされている。

子どもの年齢別による教師のかかわり方

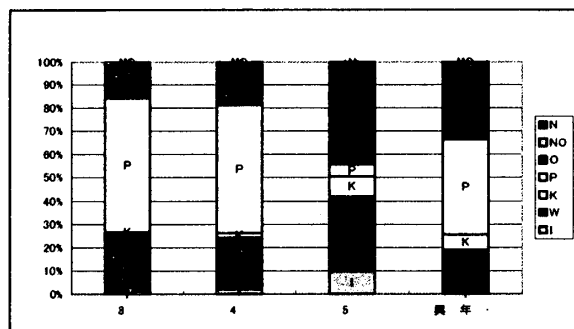


図1

### 2. 教師の年代別による子どもの音楽的表現へのかかわり方

次に、かかわり方に関する教師の理念について年代別の考察を行った。

#### (1) 集計結果と全体考察

教師の年代別による子どもの音楽的表現へのかかわり方

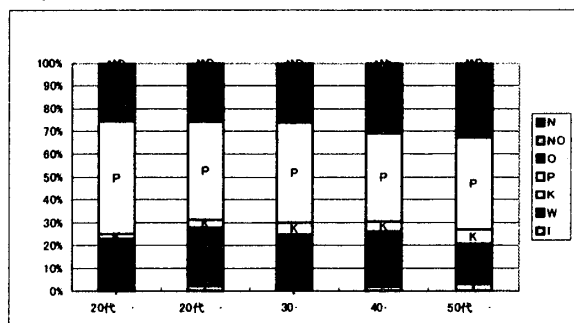


図2

おしなべてP>O>W>K>Iの順であり、20代前半ではPが最も多く見られた。

(a) かかわり方の諸要素について

I : 20代後半、40代、50代以上にわずかに見られたが30代に見られなかった。

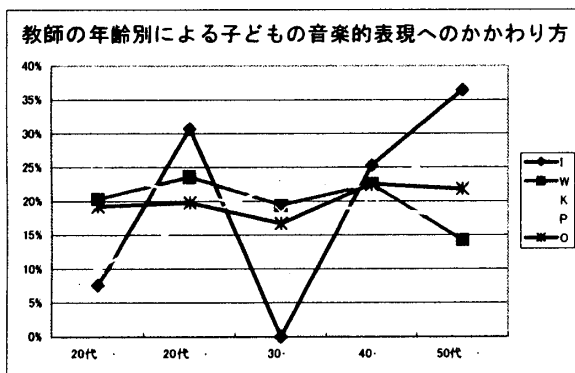
W : 50代以上はもっと少ないが、40代以下では一様に25%前後であった。

K : 50代>30代>40代>20代の順に多かった。

P : 全体の40%~50%で最も大きい。

O : ほぼ30%前後で、50代>40代>30代以下の順に多かった。

NO, Nはほとんど見られなかった。



回帰分析結果

	相関R <sup>2</sup>	係数
I	0.311	0.0066
W	0.408	-0.0018
K	0.847	0.0047
P	0.744	-0.0017
O	0.367	0.0011

図3

(b) 教師の年代別によるかかわり方の諸要素のばらつきについて

これは、各年代別の返答率の全体に対する比を各要素について表したものである。年代差が大きいのはI, Kであり、回帰分析の結果からも相関が高いとわかるように、Kは保育経験が長いほど多くなっている。Wは、50代以上で最も多く、Pは緩やかであるが年齢と共に減少、Oも緩やかであるが、30代以降で上昇している。諸要素のばらつきが最も大きいのは30代、最も小さいのは40代であった。N, NOについてはほとんど見られなかったので考えに入れなかった。

(2) 年代別の集計結果と考察

(a) 20代前半

I : 3-4歳における「指導」はなく5歳で少し見

20代前半の教師のかかわり方

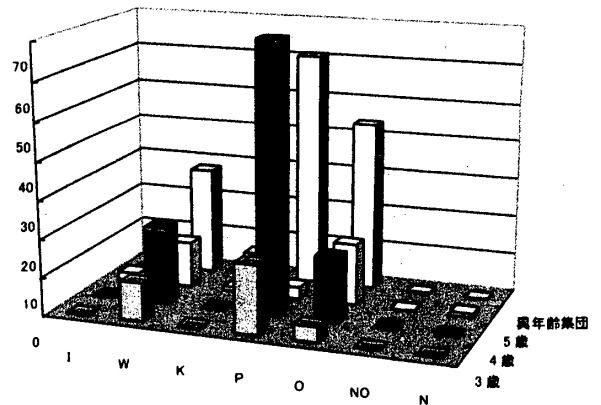


図4

られる。

W : 「言葉かけ」は、異年齢集団>4歳>5歳>3歳の順であった。

K : 3-4歳には全くなく、5歳でわずかに見られた。「ピアノによるかかわり」はほとんど考えられていない。

P : 4歳>異年齢集団>3歳>5歳の順である。これは、子どもの発達を理論的に踏まえたかかわり方であり、実践場面でも4歳児に遊びの展開が多く見られるという発達上の特徴が認められるために回答が多かったと考えられる。

O : 「観察」は異年齢集団で多く、他の年代では、観察して参加するという考え方が見られた。

NO, Nはほとんどなかった。

(b) 20代後半~30歳未満

I : 4歳5歳では少し見られるが、統制的な指導は重視されていない。

W : 異年齢集団>4歳の順に多く、続いて5歳>3歳となっている。

K : 異年齢集団などのグループへの働きかけに用いると考えられている。

P : 4歳>異年齢集団の順で特に多い。5歳児に対しては、子ども自身の自発的な活動の展開を期待しているために少ないと考えられる。

O : 観察は、異年齢集団>4歳>5歳>3歳の順で、3歳に対しては逆に直接働きかけようと考えている。

NO, Nは見られなかった。

(c) 30代

I : 見られなかった。

W : 異年齢集団>4歳>5歳>3歳

K : 異年齢集団>5歳児に対してだけ見られる。他に対しては、ピアノによるかかわりよりも、直

接活動を共有すべきだと考えている。

- P : 異年齢集団 > 4歳 > 3歳の順で、5歳児には全く回答されていなかった。
- O : 異年齢集団 > 4歳 > 5歳の順で、3歳児に対して、やはり直接的な働きかけ、活動を共有することが必要であると考えている。
- NO: Nはほとんど見られなかった。

#### 20代後半の教師のかかわり方

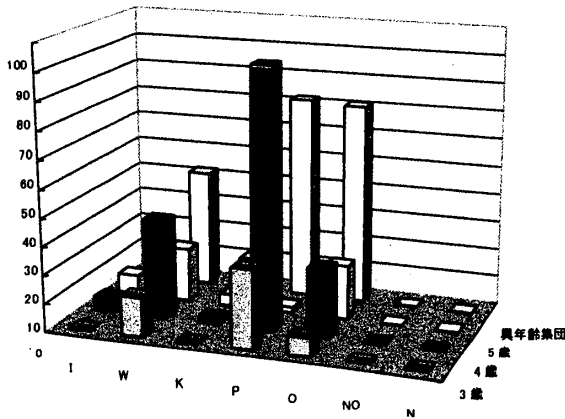


図5

#### 30代の教師のかかわり方

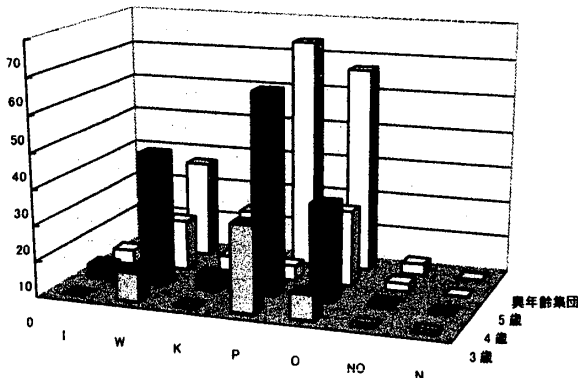


図6

#### (d) 40代

- I : 4・5歳では少し見られる。
- W : 4歳 > 異年齢集団 > 5歳の順で、遊びの展開を促そうとする働きかけを重視している。
- K : 異年齢集団 > 5歳 > 4歳であり、年長あるいは集団に少しは必要であると考えている。
- P : 異年齢集団 > 4歳 > 3歳の順で5歳では非常に少なく、年長児には子ども達だけの活動を期待している。
- O : 異年齢集団 > 4歳 > 5歳で多く、3歳で少ない。4・5歳の年齢差はあまり関係ない。3歳児に対して直接的なかかわりが必要である。
- NO: この年代ではわずかであるが、年長児や集団に

対して見られた。子どもの自発性を尊重したいという考え方であろうか。

N : なし。

#### 40代の教師のかかわり方

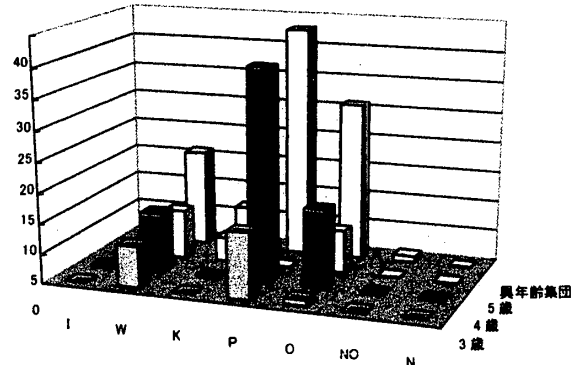


図7

#### (e) 50代以上

- I : 4-5歳で少し見られた。
- W : 異年齢集団 > 4歳 > 3歳 > 5歳
- K : 異年齢集団 > 4歳 > 5歳の順で3歳では全くなかった。
- P : 異年齢集団や4歳で多く、3歳で少し、5歳で全くなかった。
- O : 異年齢集団 > 4歳 > 5歳 > 3歳の順であり、3歳児には参加が必要であると考えている。
- NO: Nは見られなかった。

#### 50代以上の教師のかかわり方

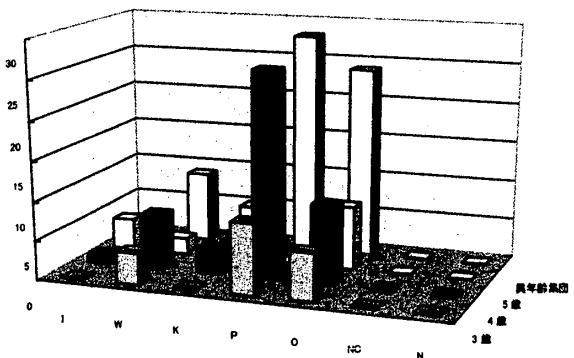


図8

#### (3) 年代別の考察

- I : 20代前半では、5歳にわずかに見られ、20代後半～30歳未満、40代50代以上では、4・5歳で少しは必要と考えられている。しかし、30代では全く必要だと認められていなかった。
- W : 20代前半と40代では、4歳 > 異年齢集団 > 5歳の順であった。20代後半～30代、50代以上では異年齢集団 > 4歳であるが、3歳と5歳については50代以上が3歳 > 5歳であるのに対して、他は5歳 > 3歳であった。

K : 20代であまりピアノによるかかわりを用いようと考えられておらず、30代でも年長児に対して以外にはあまり考えられていない。40代では5歳>4歳、50代以上で4歳>5歳でまたは集団に対して必要であると考えられている。

P : 20代では、4歳>異年齢集団>3歳>5歳の順ではあるが、参加が最も必要であると考えている。30代、40代、50代以上では、異年齢集団>4歳で多く、3歳で少し、5歳では非常少なかった。

O : 異年齢集団で多く、4歳5歳では働きかける前にまず観察するという意味で考えられていた。3歳では、観察でなく直接的な働きかけが必要と考えている。これは、年代別(保育経験年数)にはあまり関係なかった。

NO : 40代のみにもわずかであるが年長児や集団に対して見られた。しかし、他ではほとんどなかった。

N : ほとんど見られなかった。

以上のことから、教師のかかわり方についての信条には、①子どもの直接的なかかわり、参加によって子どもと活動を共有し、②子どもの年齢的な発達段階に応じて次第に退き、③子どもの自発的な活動を重視するといった傾向が見られる。特に保育経験の少ない20代では、参加が非常に重要であると考え、保育について学んだ教育効果が見られる。

次に特徴的なのは、統制的な指導がほとんど考えられていないということである。特に30代では全くなく、保育経験の年数は、教師の保育観の形成に関係があると言えよう。年長児に少しは必要であると考えられているが、子どもの自発的な活動を促して成長させたいという考え方が主流である。そこで、年代別に関係なく、観察は年中児で、直接的なかかわりが3歳児で考えられている。そして、かかわらない態度や拒否的な態度はほとんど考えられていない。

しかし、ピアノによるかかわりについては、年代によって差異が見られた。年長児に必要と考えているのは30代以降であり、保育経験が長いほど重視する傾向にあった。

#### 4. 地域別の教師のかかわり方

##### (1) 県別の集計結果と全体考察

前述のように、埼玉、群馬、茨城、福島、栃木の各県別に分類し、図9に示したように教師のかかわり方について地域的な特徴が見られるかを検討し

教師の県別による子どもの音楽的表現へのかかわり方

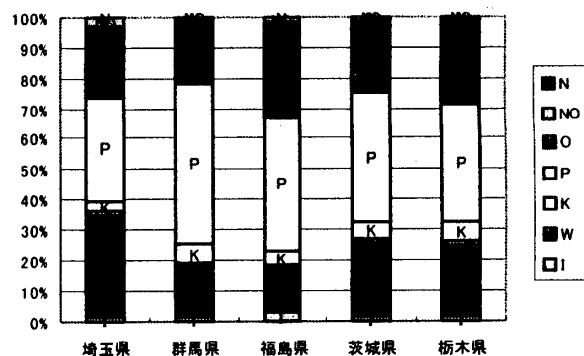


図9

た。

I : どの県も非常に少ない割合であり、福島県が他県よりもわずかに高い。

W : 埼玉、茨城、栃木の順に高く、比較的重視されるかかわり方である。

K : 非常に少ないが、群馬、栃木、茨城、福島では場面によって必要であり使えらると思えている。

P : このかかわり方が、どの県でも最も多く、特に群馬県では50%を超えている。子どもとの活動の共有が重視されていることがわかる。

O : これはおしなべて、Wと同様であるが、県によってW>Oが埼玉、茨城、O>Wが群馬、福島、栃木の順となっている。これらの要素は、観察して言葉かけをするといった順序をとっていることが多い。

N, NO: これらはほとんどなく、埼玉>福島の順でわずかに見られた。

教師の地域別による子どもの音楽的表現へのかかわり方

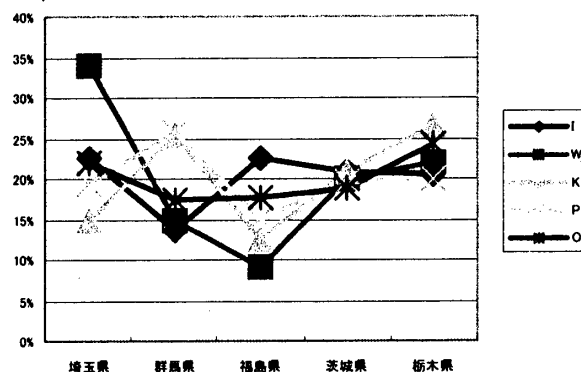


図10

また、図10は、教師のかかわり方の諸要素について、各県の返答率の全体に対する比を各要素につ

いて表したものである。したがって、栃木>茨城の順にかかわり方の要素が比較的高い位置に集中しているのに対して、埼玉>群馬>福島で、かかわり方の要素の位置にばらつきが見られる。福島県が最も低い位置で各要素間にばらついている。埼玉県については、W(言葉かけ)が特に高い位置にあり、最低位置にあるK(ピアノによるかかわり)と約20%の差が見られ、他県よりもかかわり方の要素間の比重が異なっていると言えよう。

### (2) 地域別(県別)の考察

「統制的な指導」は、基本的に5歳、4歳でわずかであり、埼玉県だけは5歳児に対してわずかにあるのみとなっている。

「子どもの活動への参加」が一様に最も多く、5歳児を除いては非常に多い。年長児には、子ども達ができるだけ自分達だけで活動ができることを期待している様子が伺える。また、「言葉かけ」には様々な考え方があがるが、栃木県3歳>5歳を除いては、5歳>4歳>3歳の順に多い。それは、活動の展開を促す場面に何度も出くわしているという保育経験のためであろう。

特に県別にばらつきが見られたのは「観察」で、栃木と茨城で5歳に最も多く、埼玉で異年齢集団の次に3歳、5歳が同じくらい、群馬と福島で異年齢集団>3歳の順であった。5歳児では、子どもの活動を見守る行動が多く見られるが、一方で3歳児の活動を受容する意味で見守る行動が考えられている場合も多い。

「ピアノによるかかわり」は、異年齢集団や年長児、年中児では使えると考えられている。また、群馬県や福島県では、4・5歳に使えると考えられているが、茨城県では4歳で、栃木県で5歳がわずかに考えられているのみであった。

「消極的、否定的な態度」はほとんど見られなかったが、子どもの「誤り」については、栃木県においてわずかながら拒否的態度をとるべきであるという考え方が見られた。

以上のように、地域によって教師のかかわり方に多少の差異が見られるものの、各諸要素については概ね類似した傾向が見られた。

## Ⅲ. 教師のかかわり方に関する理念と保育行動との比較考察

### 1. 音楽的表現への教師のかかわり方に関する理念について

ここでは、註2)の前述事例分析から抽出した子どもの年齢別による教師のかかわり方の検討を基

に、本年度の教師の意識調査から得られたデータを同様に分析した。

### <主成分分析>

表 1

説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	2.991	74.776	74.776	2.991	74.776	74.776
2	.949	23.721	98.497	.949	23.721	98.497
3	.856E-02	1.464	99.961	.856E-02	1.464	99.961
4	.555E-03	.888E-02	100.000	.555E-03	.888E-02	100.000

因子抽出法: 主成分分析

表 2

主成分得点係数行列

	成分			
	1	2	3	4
3歳	.319	-.282	2.094	-15.271
4歳	.323	-.267	.684	19.529
5歳	.147	.944	1.217	1.575
異年齢	.326	.115	-3.278	-5.095

因子抽出法: 主成分分析

上記の主成分分析の結果から、4つの主成分が抽出された。分散の結果から上位3成分で99.61%の説明力があることがわかる。主成分得点係数行列から、第一主成分は、5歳を除いた年齢に対してほぼ同様の因子付加量である。第二主成分は、3歳と4歳、5歳と異年齢で因子付加量の正負が逆であった。特に、5歳に対する付加量の絶対値が大きく、3歳と4歳では類似した傾向が見られた。第3主成分では、3歳と異年齢の因子付加量の正負が逆であり、4歳と5歳については非常に数値が低く説明されていないので考えないものとする。これらのことから、上位の2主成分は、①活動の共有・言葉、②ピアノ・統制であろうと考えられる。

また、次の立体グラフから、第一主成分「活動の共有・言葉」は、大体同様の位置にあるが、5歳で他年齢の位置から距離があることがわかる。第二主成分「ピアノ、統制」の位置は3歳4歳で同様で、5歳>異年齢の順に距離があることがわかる。

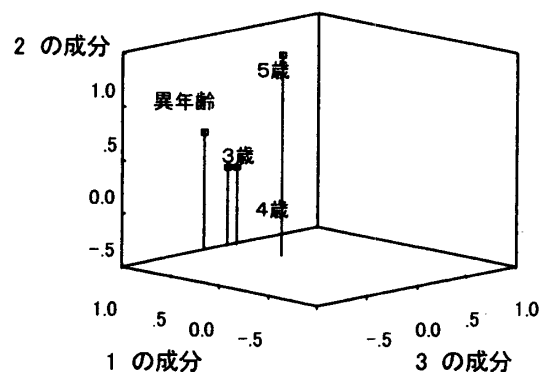
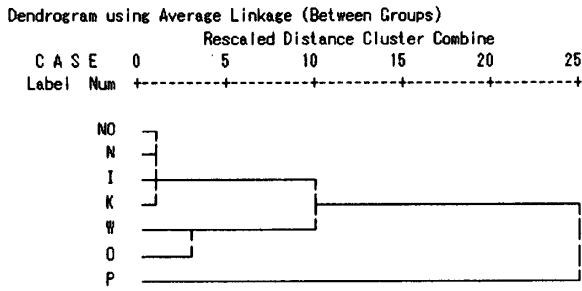


図 11

## ＜クラスター分析＞



昨年度の註2)保育行動の分析と同様に、かかわり方の諸要素に対してクラスター分析を行った。グループ間平均連結法により平方ユークリッド距離を用いて行った結果、上記のデンドログラムが得られた。これによると、まずO, W, K, I, N, NOとPとに二分されている。前者の共通点は教師という立場からの一方向的な意思によるものであり部分的な受容であるが、後者、Pは子どもと活動を共有するという相互的なかかわり方で全面的に子どもの活動を受容している。次に、二分されたグループのうち前者については、WはOと、K, I, N, NOがそれぞれ強い結合を見せている。Wは励ましの意味があり、Oにも消極的であるが励ましの意味を持っていると考えられる。また、K, I, N, NOは肯定的でも否定的でも教師の側からの示唆や統制の意味を持つという点で強い結びつきがあると言えよう。

以上のことから、得られるかかわり方の特徴としては、①子どもの活動への介入が全面的受容であるか部分的な受容であるか、が最も大きな影響を及ぼしていることが挙げられる。次に②励ましか統制かということであろう。今回著しい特徴が見られたのは、Pが他の諸要素とは距離が非常にあるということであった。

### 2. 教師の理念と保育行動との比較

子どもの3歳、4歳、5歳に対する教師のかかわり方に関して、昨年度の保育行動を見てみると、3歳でI>W>P>K>NO>O>N、4歳でW>P>I>O>NO>K>N、5歳で、I>K>P>W>O>NO>N、という諸要素の出現順位の結果であった。ところが、本年度の意識調査では、Iは、5歳児に対してわずかに見られるが、他年齢の子どもに対しては全く見られなかった。

さらに、保育行動についても理念についても同じ手順で行った主成分分析とクラスター分析の結果について比較検討した。

#### (1) 教師の保育行動の諸要素に関する分析

前述註2)に示したように、昨年度の幼稚園教諭の保育行動に関する諸要素のかかわりを、子どもの年齢別による変化によって捉えた。

得られたデータに対して主成分分析を行った。分散の結果から上位3成分で98.89%の説明力があること、主成分得点係数行列から、上位3主成分は、①肯定・否定 ②言葉・ピアノ ③強制・自発的、という特質を表していると推定した。

また、クラスター分析は、グループ間平均連結法により平方ユークリッド距離を用いて行った。得られたデンドログラムでは、W, P, I, KとO, NO, Nとに大きく二分され、この肯定的/否定的の分類が、かかわり方の諸要素において一番大きなクラスター結合要因になっていた。積極的なかかわり方である、W, P, I, Kのグループでは、WとPが最も結びつきが強く、肯定的なフィードバックを示している。W, P, Iは教師と子どもとのピアノを媒介としない関係であり、ピアノを用いたかかわりは異質であることがわかる。

消極的なかかわり方であるO, NO, Nの中では、OとNOとの結びつきが強く、その強度はWとPの結びつきの強さとほぼ同等である。O:距離を置いた観察とNO:無関心の類似性の強さから、子どもは教師が自分に対して関心を持っているかを判断基準としているのではないと考えられる。

以上の主成分分析とクラスター分析の結果から、かかわり方の特徴として、「肯定的/否定的の及ぼす影響が最も大きい」「受容的なかかわり方の中でもピアノを用いたかかわり方は、異質である」という傾向が一貫して明らかになった。

#### (2) 諸要素の分析結果の比較

上記の分析結果から、教師の保育行動と理念について以下のような差異が見られることがわかった。

主成分分析の結果については、前述の保育行動に関する主成分が①肯定・否定、②言葉・ピアノ、③強制・自発的であったのに対して、理念に関する主成分は①活動の共有・言葉、②ピアノ・統制であった。

またクラスター分析の結果を加えると、保育行動に関して最も強い影響要因は「否定・肯定」であったが、理念に関して最も強い影響要因は「子どもの活動への介入が全面的な受容か部分的な受容か」となった。

こうした結果を踏まえて、教師の信条は、理念の上では複雑でかかわり方の判断基準により幅があり、熟慮されていることが伺える。さらに、保育行動ではピアノによるかかわり方が異質であり、言葉のような励ましよりも子どもを統制する要因であったが、教師の意識の上では活動を導く要素として、子どもを統制するかかわりと同じ重みで捉えられているようである。しかし、ピアノというかかわり方



の要素は、いずれにしても影響力がある。また、保育行動の上では「観察」と「言葉かけ」が対立する要素として表れたのに対して、信条としては子どもの活動を統制する要素と対立した「励まし」の要素として互いに近い距離にあった。

このように、教師のかかわり方について、理念と保育行動にはずれが見られる。それは、理念としては子どもとの活動の共有を基本として子どもの主体性を重んじているが、保育行動においては、3歳で導入、5歳では指導的介入といった側面が強く表れていたということである。

最も理念と保育行動がかけ離れていたのは、「統制的な指導」のあり方についてであった。また、理念においては「ピアノによるかかわり」は活動の展開のために影響力のある要素と考えられているのに対して、保育行動では異質なかかわり方として、「統制的な指導」と関係のある手段として用いられていた。さらに、理念では「観察」の位置が比較的高い方であるのに対して、保育行動では低い方であり、消極的なかかわりと位置づけられていた。

## 終わりに

今回の質問紙調査の結果から、音楽的表現は保育に大きな位置を占め、教師は子どもの表現を遊びの中から発展させ、総合的に捉えようとする傾向を読み取ることができた。

また、本文には示さなかったが、質問項目Q13(1)(2)(3)(4)やQ14(1)(2)、Q15(1)(2)で、具体的な保育内容に関わる介入方法や内容に対する価値観等を考察した。教師の保育経験年数による差異は、合奏の練習の形態や子どもを劇に導入する方法において見られた。けれども、教師は一様に子どもの音楽的表現をまとまった形にしようとする目的意識を暗黙のうちに持っていると考えられる。加えて、子どもの劇化行動について、できるだけ子どもを主体とした経験、他者の役も経験しながら登場人物やストーリーの理解を深めようとする考え方が、全体の54.31%見られた。

教師のかかわり方について、「言葉かけ」や「参加」は大きな影響力をもち、理念においては「参加」が最も大きい要素であったのに対して、実際の行動では「統制的な指導」が大きい影響力を持っていたことがわかった。このことから、教師の意見として示されていたように、子どもの活動を指導してしまう、教師の不安や疑問が少なくないことがわかる。

また、かかわり方の要素によっては、地域別に差異があるものの、影響力の大きい要素に関しては類

似した傾向があることがわかった。教師の年代別によって比較検討してみると、「統制的な指導」と「ピアノによるかかわり」が保育年数に非常に関係があることがわかった。

このような考察から得られた問題点を踏まえた上で、今後さらに教師の表現へのかかわり方について、より具体的な場面における要素を見いだす方法を検討していきたい。

註

1) Lee, L., Music Education as a means for fostering young children's knowledge of dual cultures, Columbia University, Teacher's College, 2002.

Burr, S., Collaboration, Reflection, and self-assessment to promote curricular change in early childhood education, University of Southern Carolina, 2001.

Rowland, E., Every child needs self-esteem: expression, The Union Institute, 2002.

Furman, L., In support of drama in early childhood education, again, Arts and Young Children, Early Childhood Education Journal, Vol.27, No.3, 2000, pp.173-178.

Rubin, J., & Merrion, M., Creative Drama and Music Methods, Linnet Professional Publications, 1996 参照。

2) 平成14年11月、S短期大学生115名によって、学外の5県、97幼稚園で行われた一週間の観察実習中に収集された音楽的表現に関する516件について分析した。ここでは、得られた観察事例を遊びの発達段階(Rubin, 1978のスケールによる)によってカテゴリー化した。それらについて、子どもと教師とのかかわりの場面的分類、3歳、4歳、5歳という子どもの年齢による発達側面から、観察件数によって考察した。また、教師の子どもへのかかわり方の諸要素を、それらの事例から抽出して7つに規定し、年齢の発達による変化を検討するために、主成分分析とクラスター分析を行い、因子抽出を試みた。(2003年第34回日本音楽教育学会口頭発表要旨論集「幼児の音楽的表現への教師のかかわり方に関する一考察—観察事例を量的に分析する試み」参照)

3) Jalongo, M., The Arts in Children's Aesthetic Education in Early Childhood, Allyn & Bacon, 1997, 参照して、音楽的表現への教師のかかわりの諸要素を規定した。他、Crawford, B., "Teacher intervention within dramatic play," Education of the University of Toronto, 1997, Kontos, S., & Keyes, L., "An ecobehavioral analysis of early childhood classrooms," Early Childhood Research Quarterly,

1999, 14, no. 1, pp. 35-50 参照.

4) 本稿で用いた質問紙調査の質問項目の内容は、以下の通りである。なお、質問項目11から12までの回答の選択肢は、前述、教師のかかわり方の諸要素 I. P. W. K. O. NO. Nに相当するものにした。

i) 勤務地の所在について(県・市町村)

ii) 年齢(年代による回答)

iii) 保育経験年数

1. (1) 幼稚園での園児による音楽発表会が一年に行われる回数(回答は3つの選択肢)  
(2) 音楽発表会の準備期間(回答は4つの選択肢)  
(3) 園児の発表会における音楽の必要性(回答は5つの選択肢)
2. 勤務先の幼稚園で、子どもの音楽的表現つまり、歌うこと、音楽に合わせて動くこと、合奏すること、音楽劇をしたりすることを重視していると、園長や父兄は考えているか。
3. (1) 2の件について回答者自身はどう考えているか。(回答は5つの選択肢)  
(2) 園で、子どもの表現の中で、音楽的表現よりも重視されていることがあるか。(回答は4つの選択肢)
4. 発表会や運動会などの行事の中では、音楽的表現が必要であると思うか。(回答は5つの選択肢)
5. 日常の園生活における保育の中でも、子どもの音楽的表現は必要であると思うか。(回答は5つの選択肢)
6. 園では、子どもの日常的な園生活の中から音楽的表現が生じることが多いか。(回答は6つの選択肢)
7. 日常的な園生活の中で、子どもの音楽的表現がたびたび起こるような工夫、環境構成をしているか。(回答は2つの選択肢)
8. 回答者と園児との日常的なかかわりの中で  
(1) 例えば朝のあいさつ時、掃除をしている時などに決まって行われている歌あそび等は、役立っていると思われるか。(回答は5つの選択肢)  
(2) もしも役立っているとすればどのような点においてか。(回答は5つの選択肢)  
(3) もしも役立たないとすれば、どのような点においてか。(回答は3つの選択肢)
9. 教師の指導で始まった音楽的表現の場面以外で生じた子どもの自発的な音楽的表現にかかわる必要があると思うか。(回答は6つの選択肢)
10. 日常的な園生活の中から生じた音楽的表現にか

かわる場合、回答者はどのように対応するか。

(回答は6つの選択肢)

11. 日頃の子どもの園生活の中での様子について  
(1) 3歳児がマラカスを振って音を出しているときの対応。  
(2) 砂場でトンネルをつくっていた4歳児が「シュッ、シュッ、ポッ、ポッ、」とふしをつけて歌いだした。このときの教師のかかわり方。  
(3) 次にそこへ、他の4歳児がおもちゃの船を持ってきて、「うーみーは広いなおおきいな」と歌いだした。子ども達はやがて、砂場を基地にして遊び始めた。このときの教師のかかわり方。  
(4) 5歳児が一人でピアノを弾いているのが見えた。このときの教師のかかわり方。  
(5) 自由遊びのとき、2・3人の4歳児が、何日か前に先生に教えてもらった歌を歌っていた。その歌う歌詞は教えてもらったものと少し違っていたし、音程も大きく外れていた。このときの教師のかかわり方。  
(6) 4・5歳児が数人、先生と折り紙を折っている。そのうちの一人が「やった、かえるができたよ。」すると別の一人が「かえるのうたがきこえてくるよ、ゲーロ、ゲロゲロ…」と替え歌を歌いだした。その様子を見た、教師の対応のしかた。  
(7) 4・5歳児が、先生に読んだもらった絵本の中の登場人物の役を演じ始めた。その様子を見た教師の対応のしかた。
12. 昨日、教師が子ども達と一緒に劇遊び「大きなかぶ」をしたと想像した場合。  
(1) 今朝、幼稚園で、子ども達が自ら昨日の「大きなかぶ」を演じ始めた。そのときの教師の対応のしかた。  
(2) それを演じているとき、先生と一緒にしたストーリーとは違うことを、子ども達が演じ始めた。そのときの先生の対応のしかた。
13. 回答者が子どもに合奏をさせようと思う場合のより適切な方法について  
(1) メロディ楽器とリズム楽器のどちらを先に教えるか。  
(2) 子どもが数人ずつ各楽器を担当するが、先にそれぞれの楽器ごとに練習した方が良いか。  
(3) 合奏する曲をある先生が弾いて、子ども達拍子を取りながら歩いた。先生は、子どもに出て

くる楽器のパートを、歩き方や手拍子で表現させた。回答者は、このようなことは必要だと思うか。

(4) もしも(3)の活動をする場合、合奏の前にする方が良いか、それとも後にする方が良いと思うか。

14. 回答者が、子どもに読み聞かせをした童話を劇にしてみることを考えたとする。

(1) 登場人物の配役をどのようにして決めようと思うか。(回答は、4つの選択肢)

(2) 5歳児の28名でその劇をする場合

①登場人物は動物7匹であるとき、どのように配役をしたらよいか。(回答は3つの選択肢)

②ナレーターは誰が担当するか。(回答は3つの選択肢)

③練習の仕方について(回答は5つの選択肢)

④先生は、その童話のストーリー通りの劇をすることを考えたとする。ところが、子どもが演じているうちに、少し違うストーリーを思いついた。

そのストーリーを途中で考え直したり、つく

り変えたりすることをどう思うか。(回答は4つの選択肢)

⑤子どもは、ストーリーばかりでなく、登場人物を新しく創り出すことを思いついた。このことについてはどう思うか。(回答は4つの選択肢)

15. (1) 幼稚園で音楽発表会をすることになった時、その内容に劇が必要だと思うか。(回答は5つの選択肢)

(2) (1)で必要と答えた回答者は、その劇の題材としてどのような種類のものを選ぶか。(回答は5つの選択肢)

○ 幼稚園教育における子どもの音楽的表現に関することについての意見、疑問点について

#### 謝辞

この質問紙調査にご協力くださいました幼稚園の諸先生方、また調査実施に際してご助言くださいました学科長藤原教授に厚く御礼申し上げます。